

満州引揚の記

中間市 熊谷 房江

私の父は、旧満州（現在、中国東北地方）国の官吏刑務官でした。昭和15年、私3歳のころ、当時旭板硝子に勤めていましたが、満州国の官吏募集で、当時の給料が破格に良かったとかで、試験を受けたら合格したので満州に渡ったそうです。

奉天、撫順と転勤し、終戦を迎えたのは、ハルビンでした。かすかな記憶ですが、8月上旬までは本国と異って、表面的には平和でした。8月9日、ソ連の参戦があつてからは、焼夷弾が落されるようになり、夜も着衣のまま、夜中に防空壕に入ることもありました。

8月12日ころだったと思いますが、父は日本の敗戦を予期してからか、書類、書籍のたぐいを1枚1枚燃して、ふろをわかしていた後ろ姿が妙に印象に残っています。

私の家族は父、母、私、撫順で生まれた5才と3才の弟、生後1ヶ月の弟の6人家族でした。8月13日、家族は、身の回りの荷物と、役所に蓄えてあつた米、みそ、しょうゆなどの食料をトラックに積んで、職員一同、地方法院に集団疎開しました。

そして8月15日。ソ連軍の進駐で、食料は全部没収され、父たち男の人はシベリアに連行され、残された婦女、子供は隣の学校に、難民として収容されました。

学校の周囲はソ連兵が小銃を持って見張り、学校の中は、次々と送りこまれてくる難民であふれ、食事は来る日も来る日も、クーリヤンの中に、ナスか何か少し入つたおじやのようなものが1杯ずつ。

それでも初めのうちは、持っていた非常食のカンパンがあつたので、空腹をしのげたのですが、幼い弟たちは今までの食事と180度の変化で、食事を受け付けず、日毎にやせ衰えました。衛生状態は、ふろはもちろん、手を洗うことさえまなならず、トイレもあふれているというような状態です。

当然病気もまん延して、1日に何十人という人が亡くなり、霊柩車がひっきりなしに出入りし、遺体を荷物のように投げ込み、どこかへ運んでいました。

聞いたところによると、墓地といつても、一人ひとり埋葬する場所もなく、広く穴を掘って遺体を並べ、土をかぶせ、また遺体を並べる、いわゆる大根漬けの状態だったそうです。

例外なく5才の弟も栄養失調と病に侵され、医者に診てもらうでもなく、薬を与えることもできず、9月16日に亡くなり、私どもの手元には遺骨もなく、ただ一握りの遺髪が残されただけです。そして9月18日、突然収容所の学校からトラックに乗せられ、ハルビン郊外にある開拓団に連れて行かれました。

母は、やはり栄養失調と病に侵され、高熱にうなされている3才の弟を背に、私は生後もない末の弟を背に、トラックに揺られ、もと住んでいた官舎の横を通りましたが、戸も窓も壊され、レンガの壁だけが残る無残な姿でした。

何時間トラックに揺られていたのか、着いた時には、母の背中の弟は、苦しまぎれに母の髪をつかんだまま、事切れていました。

10月の初めころだったと思いますが、父が釈放されて帰ってきました。満州の9月、10月はもう寒く、夜などは零度近くなることもあるのですが、夏に連行されたままの服装で、わずかな食料で強制労働をさせられたため、体を壊し、送還されたのでした。

それからハルビン市内に戻り、引き揚げが始まるのを待っていたのですが、父は体を壊していましたし、官吏だったということでマークが厳しくして、働けず、母はロシア人の家の家政婦とか、路上で物売りをしたりして働きました。

当時8才の私は、末弟の世話をしていましたが、その弟も、生後4ヶ月という短い一生を閉じました。

昭和21年、待望の引き揚げが始まりました。手荷物は制限されていたので、着るものは着られるだけ身に着け、わずかな身の回りの物をリュックに詰め、背負いました。父は体を悪くし、自分の体を動かすのがやっとという状態だったので、母は、父と母の分を持つので、私は自分の物は自分で持たなければならなかったのです。

汽車に乗り、汽車といっても窓もなく、扉を閉めると真暗な貨物車に押し込まれ、一駅走ったら止まり、時計を出せ、女を出せ、と暴徒に襲われ、汽車を降りて逃げたこともありました。

父は無理がたたり動けなくなり、母はそれでも皆と行動を共にして、一刻でも早く帰国するのを念願し、隠し持っていたお金を渡し、他人さまにお願いして、戸板を担架の代わりに父を乗せ、必死の思いで南下を続けました。

当時8才の私は、大人の人に置いて行かれないように、ぴったり母について歩いていたと思います。そのうちに父の容体もますます悪くなり、他人さまにも迷惑のかけ通しだったので、母もあきらめて、病院部隊に編入しました。

そのため3ヶ月の足止めになりました。その間、赤十字の方々の奉仕で、父も治療を受けましたが、既に手遅れで、容体は悪くなる一方で、母はせめて祖国の土を踏ませたいと、そればかり念じていました。

10月10日、やっと引き揚げ病院船に乗船することができ、コロ島を出航し、博多港を目指しましたが、その船脚の遅いこと……。

航行中、二人の方が亡くなりました。そして水葬です。遺体を海に投げ、その周囲を船が汽笛を鳴らして、めい福を祈るのです。母はそれだけはしたくないと父を励まし続けました。船脚の遅いのと、船酔いと闘いながら二日目、やっと祖国の島影が見え、一同どれほど歓喜の声を上げたことでしょう。

そして、やっと祖国にたどり着いたと分かったのかどうか、父は息を引き取りました。

博多港に停泊すること3日、防疫とか手続きが、いろいろあったのですが……。その間、父の遺体は先に上陸させられ、だれからもみとられることもなく茶毘（だび）に付され、15日に上陸を許可された、母と私の手元に、白木の箱に入った遺骨が手渡されました。

肉体的にも精神的にも疲れ、汚れ果てた私達は、真っ白な骨箱を胸に、博多駅から父の故郷の中間にたどり着きました。

10月15日、中間では戦後初めてのお祭、おくんちで、商店街は万国旗と、造花で飾り立ててありました。夜も遅く、人通りはなく、商店街を通り抜け、祖母やおじ、お婆のいる家の門戸をたたいたのです。

幼い弟たち3人は大陸の土になっているでしょう。もし、弟のうち一人でも強い生命力を持って生きていたとしたら、おそらく中国の人に預けてきたでしょう。生きてさえいれば、いつかまた会えると信じて。

そして中国残留孤児の中に捜し求めたことでしょう。私と母の生きざまも変わっていたと思います。

でも幸か不幸か、3人とも死を見届けているのです。私自身も、もし産後間もない母がどうにかなっていたら、残留孤児の仲間入りをしていたかも知れないのです。残留孤児の方々の報道があるたびに胸が痛むのです。